



曉鐘の音

NO. 18

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2020.11.26

コロナ後の世界を見据えて

教職実践専攻 (教職大学院)

教授 田仲 誠祐

10月から、待ちに待った対面授業となりました。直径1000km級の大型台風も、わずか100nm(ナノメートル)のウイルスも、人類にとって大きな脅威です。ただ、前者が(地球的規模でみると)局所的なのに対し、目に見えない後者がこれほどまで完璧に世界の様相を変えてしまったことには驚きです。今、社会が経済活動の方向に動き始めたとはいえ、すべてが元に戻るものではありません。教育界でも大きな変化があるでしょう。特に、ICTの捉え方については、コロナ禍を経て大きな転換点を迎えたのではないのでしょうか。

この4月までは、私は、学校教育の本丸ともいえる授業を遠隔で行うことについて懐疑的でした。教育では同一の空間を共有する空気感こそが重要だと考えていたのです。ところが、(やむを得ず)ZOOMで遠隔授業を実施して間もなく、ICTはこれからの授業を変えうると直感しました。第一に、学校がもつ空間的・時間的制約を大幅に解消します。いつでも、どこでも授業が可能です。海外の著名な専門家の話を聞いたり、他の教職大学院と交流したりするなど、新しい発想による授業の可能

性が広がります。第二に、工夫次第では充実した相互作用が可能です。学生の感想でも、「相手意識が高まり集中できる」「集団の圧力が薄い」「対面よりも焦点化した意見交換が可能」「資料を効果的に提示して説明できる」のように、プラス面のものが多数あります。私自身、資料等の準備、学生理解、雰囲気依存しない明瞭な伝え方等で、以前よりもさらに細かく心配りするようになったと実感しています。

もちろん、遠隔授業では学生の心理面や人間関係の構築等で、留意すべき点もあります。対面授業と遠隔授業は二者択一のものではありません。これからは対面授業を基本としつつも、ICTの効果的活用が益々求められることになるでしょう。コロナ後の変化は社会全般にも及びます。満員電車で会社に行かなければ仕事ができないという前提はほぼ崩れつつあります。東京にいなくても、地方でも本社勤務が十分可能な時代になるでしょう。教育だけでなくあらゆる点で、「令和は、秋田から発信できる時代になる」ことをコロナウイルスは教えてくれたのかもしれない。

水の大切さ・有り難さ

教職実践専攻 (教職大学院)

教授 栗林 守

現在の学生のみなさん(学部生も院生も)は総じて昔(我々が学生の頃)よりも遙かに立派です。

これなら社会に出て立派に活躍できる人たちになるだろうと期待しています。頑張ってください。

さて、私は美郷町六郷という所に住んでいるのですが、我が家には上水道がきていないため、地下水をくみ上げて生活用水として利用しています。さぞ人里離れた場所で不自由な暮らしを強いられていると感じる人もいるかもしれませんね。暮らしている場所は商店や住宅が広がる比較的町を中心に近いところです。そもそも美郷町には町全体をカバーするような大規模な上水道がない（簡易水道なるものは整備されている地域はありますが）のです。昔からこの地域では清水の湧き出ているところが何カ所もあり、数メートルも地下を掘れば地下水脈にあたる（現在は水位が下がってしまっていて我が家では20数mボーリングしていますが）ような地域でしたから、どの家も地下水をポンプでくみ上げて生活しています。私の子供の頃にはその揚水ポンプすらなく、手押しポンプを使っていました。洗面から炊事、洗濯、風呂など手押しポンプを押しての水ですから、その労力は大変なものなのです。

やがて、電気で動くポンプが利用できるようになってずいぶんと楽になりました。ところが、我が家の住宅事情が悪くて隙間風がびゅうびゅう吹き込む家でしたから、真冬には家の中にある蛇口や水道管でさえ凍結してしまい、昼近くにならないと水が出なくて困ったものでした。そんなことを思い出してしまう。水温は年間を通じて13℃前後ですから、人々の生活にとっては、夏は冷たく冬は温かいという大変ありがたいものです。東日本大震災のときには【停電＝水が出ない】という事で大変困りました。町のあちらこちらに自然と水が湧き出る清水の水を汲んでくればなんとかなりますが、ポリタンクに入れた水の重いことやタンク1～2個の水はあつという間になくなってしまふことで、またもや水の有り難みを感じる機会となってしまいました。



宮城教育大学大学院との院生交流会に参加して

学校マネジメントコース

現職院生1年次 川俣 玲

2020年9月11日（金）、オンライン（ズーム）にて、秋田大学9名、宮城教育大学13名の合計22名で教職大学院院生交流会が開催された。昨年度は宮城教育大学に赴き、両大学院合わせて69名（秋田大学27名・宮城教育大学42名、大学教員を含む）が参加して、「秋田の授業力向上について」や「大川小学校・戸倉小学校訪問から学んだこと」についての発表を通じた交流会、情報交換会、懇親会が行われ、直接的なコミュニケーションをとりながらの交流会が行われたが、今年度はコロナの影響から直接顔を合わせながら交流す

ることは叶わず、ズームを利用した画面越しでの交流会となった。

当日は午前中の実施であった。ズームを使用した開催ということでネット環境など不安な要素があったが、全員が無事に参加することができた。会の流れとしては、はじめに開会行事としてオリエンテーション、宮城教育大学教職大学院代表者からの挨拶があり、その後ブレイクアウトセッションで校種ごとの6つのグループに分かれ、それぞれのグループで校種に関する話題や研究テーマなどについて協議・情報交換を行った。

自分は高校所属の4名（秋田大学2名、宮教2名）でグループ協議・情報交換を行った。企業との連携や探究活動、校内組織のあり方についてなど、それぞれの研究テーマに関する話題で話が尽きることがなく、あっという間に80分ほどの時間が過ぎた。同じ校種の他県の先生方と情報交換を行う機会というのはあまりなかったので、大変貴重で、有意義な時間であった。また、この交流を通して、県や所属する高校は違っても同じような悩み

を抱えている、ということを知ることができたのは大きな収穫であったと感じている。

閉会行事では、秋田大学教職大学院代表者から全体のまとめと挨拶がなされたが、会が有意義な時間となり、成功裏に終わったことを示すものであった。後日まとめられた感想からは、次のような意見が見られ、参加者それぞれが様々な学びを得ることができたことがうかがえる。

【感想の一部を抜粋】

自身の研究に関連した研究テーマのグルーピングだったからこそ、充実したグループ討議ができたと思います。校内研修も同様ですが、やはり「共通の話題」や「共通の視点」が大切だと思いました。宮城県内の学校の取組も参考にしながら、自身の研究の考察を深めていきたいと思います。今日は、誠にありがとうございました。

大学院で学ぶ現職教員という同じ立場で、大変和やかにお話することができました。初めて顔を合わせたとは思えないほど話が弾みました。堅苦しくない会であることがよい方向に作用したと思います。

第2回があってもいいかと思いました。今度は、教育現場の共通課題について話し合うのもいいかと思いました。

今回のズームでの交流会を経験して、お互いの顔を見て直接コミュニケーションをとりながら情報交換や意見交換をするのがベターではあると思うが、コロナの影響から様々なイベントが中止に追い込まれていることを考えると、ゼロよりは

このような形でも交流会を実施できたということは大変意義深かったと感じる。ここでの経験や情報を各々が振り返り、深めることでさらなる成長につなげていきたい。

教職実践インターンシップⅡ

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生2年次 飯澤 玲央

インターンシップ実習Ⅱはカリキュラム・授業開発コースの2年次が秋田市内協力校で年間30日以上実習することができる、秋田大学教職大学院の特徴的なカリキュラムの一つです。本実習は目的が大きく2つあります。1つは、学校現場で組織の一員として働くことができるような教師力の向上です。もう1つは、1年次からの課題研究について、検証授業を行うことです。

私は、本実習を行うにあたって、1つの目標を立てました。それは、指示がある前に自分から聞いたり動いたりすることです。当たり前と言えば当たり前のことですが、これまでの実習では、配属学級の学級担任に「～してもらっていいですか?」「～お願いしてもいいですか?」といった、指示があってから動くことが多くあり、私はできていませんでした。来年度から学校現場で学

校の組織の一員となる身として、自分で判断し、行動することができる教員となるためにこのような目標を立てました。

この目標を達成するために、「観て、考える」ということを意識するようになりました。なぜなら、教師や児童の1つ1つの仕草や言葉には理由や意図があるからです。児童の言動を観て、なぜその言動をとったのかを考え、教師が自身の行動を決めていくという過程が日々数えきれない回数行われています。この過程で「考える」という段階を疎かにしてしまうと、一人よがりの指導になってし

まったり、その後の自分の行動を決定できなかつたりします。実習中に自分から行動できたこともあります。全てもできたというわけではないので、引き続き心がけ、習慣化していきたいと思えます。

「人間は、考える葦である。」これは、私が好きな言葉の1つです。自分で考えて手にした答えは決して忘れません。私自身が考えることはもちろんですが、すぐに答えを教えるのではなく、児童が自分で答えを見つけることができるような指導ができるように残り少ない大学院生活を過ごしていきます。

教職インターンシップ I

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生1年次 三保 翔

インターンシップ実習 I は、自分たちの研究を中心にそれぞれが課題をもって臨んだ。学部時代の教育実習とは違い、インターンシップ実習ということで例年よりも意識を高くもつことができている。今年度のインターンシップ実習 I ではコロナの影響が大きく例年通りとはいかないことが多くあり、思うように研究を進めることができないこともあったが、最善を尽くし、来年につながる学びをすることはできたように感じている。インターンシップ実習 I で学んだことは多くあるが、大きく2つのことについて述べていく。

1つ目として、児童理解についてである。児童理解のための観察として私は全体を見ることを中心に実践していたが、積極的な児童が目立ってしまい、一部の児童のことしか見ることができていないように感じた。担任の先生からのアドバイスとして児童の観察でも焦点化が大事だということを教えていただいた。はじめは全体から把握してもいいが、一部の児童がどうしても目を引いてしまうため、今日はこの子とのコミュニケーションを多くしようといった焦点化をしていくことで時間はかかるが、一人一人の実態把握につながってい

くことを学ぶことができた。

2つ目として、体育の授業における場づくりである。今回の授業の割り当てでは三年生と合同で体育館を使用している。体育館が一面使えないため安全面を考慮した場づくりを工夫した。体育では、児童が自ら活動してできなかったことができるようになり、運動の楽しさや達成感を知ることが大切である。そのため、活動時間を充実させることがかなり重要になる。今回のインターンシップ実習 I では安全面の考慮と並行して、できるだけ多くの児童が同時に活動できる場づくりについて学ぶことが多くあった。

全体として思うようにいかないことが多くあっ



たが、来年につながる経験が多くできたと感じている。来年の実践研究報告に向けてインターンシ

ップ実習 I で学んだことをいかして準備を進めていきたい。

岩見三内小・中学校の訪問を通して

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生 1 年次 大関 隆貴

9 月 8 日（火）に「学校教育の現代的課題」の授業の一環で、秋田市立岩見三内小・中学校を訪問しました。岩見三内小中学校は、校舎一体型の小中併設校として 10 年目を迎えている学校です。私自身初めて岩見三内小中学校を訪問し、周りが自然に溢れてとても充実している環境が整っている印象を受けました。

校舎一体型小中併設校の利点を数多く目にすることができました。例えば、日常的に異年齢の集団がともに触れ合う環境があることです。多くの経験を異年齢で行うことを通して、心を育てることができると思いました。また、先生方が校種を越えた意見交換を行うことも可能です。それに伴って、それぞれの校種の先生が小学校と中学校を行き来しやすいため、9 年間子どもの成長を直接観察できることもあります。子どもの成長を称賛し、さらなる指導をすることで子どもの人格形成につながっていると感じました。

岩見三内小・中学校の特徴ある取り組みの一つには、「自然いっぱいオープンすくうる」というものがあります。地域の方との直接的な交流、釣り、農作業などの恵まれた自然環境を活かした体験活動や、伝統工芸・伝統芸能の技術体験などと

いった自然環境に恵まれた少人数の学校への入学・転入学を通学域の枠を取り外し、秋田市教育委員会が認める制度です。過去には埼玉県からも「自然いっぱいオープンすくうる」について問い合わせがあったということもあり、自然豊かな岩見三内ならではの特色を学校教育に活かすことができているのではないかと考えました。

校舎一体型小中併設校では、幅広い年齢層の子どもたちがいる環境のため、実態に応じた言葉選びや話し方があることの難しさを校長先生から伺いました。また 9 年間同じ環境のため、競争意識が少ないことも、難しさに挙げられていました。どのようにして教師が生徒の支援を行っていくのか、また小規模校としての良さや強みを活かし個別に応じた指導をどう充実させていくのか、といったことも課題としてあります。ただ、こうした難しさや課題を強みとして捉えることも一つ大事なのではないかなと考えました。

今回の学校訪問を経て、地域とのつながりや関わり大切さというものがこれからさらに重要になってくると感じました。社会に広い目を向けてどのようにして教育を作っていくべきなのか、さらに深めていきたいと考えます。

研究構想中間発表会について

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生 1 年次 佐藤 大星

9 月 29 日に、教職大学院の院生による、研究の中間発表会が zoom で行われました。今年はコロナの影響で実習の計画を立てることができず、研究においても先を見通せない中での発表となりました。

また、私を含めるストマス 1 年生は午前には実習があり、遅れての参加となったため、他の院生の発表を聞いて参考にするのはあまりできませんでした。自分の研究内容の構想を発表し、

意見や質問をいただいて、研究を検討、修正することができたと思います。

私はなかなか研究内容が決まりませんでした。担当教員や他の院生と何回も話し合い、文献を読み、小学校理科における課題を見つめ直し、原因を探し、解決するためにはどうするのかを何回も考え、研究する内容が決まりました。改めて研究の難しさを感じましたが、私たちの研究が学校現場の教員や子どもたちの役に立つということも改めて実感することもできました。

発表では、研究に対する思いや現段階の方向性、計画などについて話させていただきました。改めて言葉にして発表してみると、私の研究の至らないところが顕著に見えてきました。特に、検証の

方法については、私自身これで良いのかという不安があったため、たくさんのご意見や参考になるお言葉をいただきました。一人では解決できなかったこともあるため、今回の中間発表がとても有意義だと感じました。今回の意見を参考にもう一度検討して、自信をもって研究を進めていきたいと思っています。

「巨人の肩の上に立つ」という言葉があります。これは、先人の積み重ねた発見に基づいて何かを発見することを指します。私たちは今、様々な方の論文や文献を読み、やっと巨人の肩に立った状態です。ここからさらに、広い視野をもち、検証や仲間との討議を重ねていき、学校現場で活用される研究を進めていきたいと思っています。

対面授業復活を祝して

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生1年次 高橋 海渡

私はおしゃべりが大好きである。学部生時代を思い返してみても、卒業論文を完成させるために研究室に行ったはずが、おしゃべりを3時間程していた記憶がある。後期授業が対面実施され、人間と対面で会話する機会が増えたことにより、「生きている実感」を得ることができた。

真面目な話をすると、前期の大学に出校できない期間があったからこそ、人と対面で会話することの奥深さを感じることができた。ZOOMを活用したオンラインの講義自体、私は嫌いではなかった。画面を通して会話ができるし、どの講義でも議論する時間が設けられていたからである。(大学まで移動せずに講義を受講できたこともありがたかった。)しかし、ZOOMの画面を通してする会話は、「単調なやり取り」に感じられることが多かった。対面授業が始まり、対面で会話する機会が多くなると、「会話」というものを客観的に見つめ直すことが増えた。対面での

会話は言葉にその人のオーラが上乘せされている感じがする。(オーラが見えるわけではない。)そのオーラがあるからこそ、「人間味」が生まれるのだと再認識できた。

書くことが無くなってしまった。教職大学院なので、教育に絡めた話も一応記しておく。コロナウイルスの影響で県内の学校では自宅待機や分散登校などの措置がとられていた。今後の社会情勢によってはこのような措置がまたとられることは十分あり得るだろう。全国の学校では、オンライン授業を推進していこうという動きもしばしば見られるが、「子どもの社会性を育む」という役割が薄れてしまうのではないかと不安がある。地域コミュニティが希薄になっている現状、子どもの社会性を育むことは学校に強く求められる。このような社会情勢の中、教師としてどう子どもに働きかけるかを常に考え続ける必要がある。



対面授業の様子



院生室にもパーティション導入

今後の行事予定一覧

2020年	12月	1日 (火)	実習後の計画についての説明
	12月	21日 (月)	「実践研究報告書題目届」の提出締切
2021年	1月	6日 (水)	実践研究概要発表会
	2月	4日 (木)	事前発表会
	2月	8日 (月)	「実践研究報告書」の提出締切
	2月	19日 (金)・20日 (土)	教師力高度化フォーラム
	3月	15日 (月)	「実践研究報告書」の最終提出締切